

大学生に読書を促す授業実践

——「おすすめの一冊」プレゼンと読書記録アプリによる読書体験の共有——

橋 本 信 子

キーワード 読書指導 書評作成 読書アプリ 読書習慣 おすすめの一冊

目次

1. 本稿の目的	61
2. 大学生の読書実態と論点	62
2-1. 大学生と読書をめぐる議論	62
2-2. 本学経営学部生の入学時の読書実態	63
3. 読書を促す授業実践	65
3-1. 読書指導を実践する科目の概要と指導方針	65
3-2. 学生はどこで書籍の情報を得ているか	67
3-3. 読書体験の共有 「おすすめの一冊」の紹介と読書アプリの活用	69
3-4. 学生はどのような本を読んだか	70
4. 読書を促す授業実践の効果	72
5. 今後の課題	76

1. 本稿の目的

大学生の読書事情について書かれた論文や報告、新聞・雑誌等の記事は、決まって「若者が／大学生が読書をしなくなって久しい」という趣旨のフレーズから始まる。実際、後述するように大学生の読書時間が低迷しているのは確かである。飯田（2023）によれば、始業前の10分ほどを読書時間にあてる「朝の読書」のような取り組みの効果で、小中学生の平均読書冊数はこの20年ほどで回復しているという。しかし、高校以降の読書時間は低水準であることは否めない。飯田によれば、高校生以上ともなれば、学習環境や家庭環境が本人の読書習慣を押し上げることは難しいという。その理由を飯田は遺伝子の影響であるとしている。

遺伝子による読書習慣は変えられないという説の真偽の検討は筆者の研究能力の範囲を超えるため本稿では扱わないが、たとえそうであったとしても、高等教育機関としては大学生に読書を促すことをあきらめるわけにはいかない。ましてや大学生に必須の学習スキル習得を目的とする科目を担当する教員にとってはなおさらである。

本稿では、大学生の読書実態についての近年の論点を紹介し、大阪経済大学（以下、本学）経営学部生の読書実態を踏まえた読書を促す授業実践と、その効果について報告する。

2. 大学生の読書実態と論点

2-1. 大学生と読書をめぐる議論

大学生の生活実態を長年調査している全国大学生生活協同組合連合会が発行する『生活協同組合研究』誌は、2018年7月号で「本を読まない大学生～大学教育と大学生協はどう関わるか」という特集を組み、大学生の読書実態や、大学における読書教育、大学生協の読書推進の取り組み等について40数ページにわたって8本の論文やコラムを掲載している。また、『IDE 現代の高等教育』誌も、2020年6月号で「大学生と読書」を特集し、9本の論考を掲載している。それぞれ興味深い指摘や論点、提言が述べられており、執筆者の間で前提とする大学生像の相違や意見の相違があるのも興味深い。

これらの論考で引用された各種の調査や後述の最新の学生生活実態調査（2024年発表）からも、大学生が読書をしなくなって久しいというのは明白である。しかも、金子（2020）によれば、入学の難易度にかかわらず、大学生の読書量は「普遍的に減少」しているという。

そもそも日本の大学では本を読むことを課さなすぎるのではないかという問題意識のもと、玉（2020）は、大学生協の全国大学教職員委員会委員長の職にあるとき、「リーディングリスト運動」を提言したという。アメリカ流に必読参考文献リストを提示し、読んでこなければ成り立たない授業スタイル（リーディング・アサインメント）を取り入れるというものである。しかし、日本の大学生の一学期における履修科目数の多さから、そうした教育方法を実施する時間的余裕がない実情があることも指摘している（玉、2018）。

ところで、読書とは何を指すのか。大学生の読書に関する研究の多くが、大学生の想定する読書とは小説を読むことであると述べる¹⁾。そのため、佐々木（2018）は、教科書や参考文献を読んでいても読書と認識していない大学生がいる可能性は否定できないと指摘する。大学生のみならず大学人においてもその傾向はあるようで、玉（2018）によれば、前段の「リーディングリスト運動」を提唱するにあたっては、「“読書”をめぐっては、大学人の間に、大学の正課とは別の余暇時間を楽しむ趣味といった観念を持つ人も少なからずいて、大学教育としての“読書”を論じる上での障害にもなっていた」ため、「リーディング」という言葉を用いたという。

浜島（2020）は、「大学生の読書時間はスマホ使用が奪ったのではないか？」との仮説のもと、全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」2014年から2017年の4年分のデータを詳細に分析したところ、スマートフォンの利用の有無にかかわらず、ある学生には読書習慣があり、また別の学生には読書習慣がないことがわかったという。よって、浜島は「スマホは大学生の読書の『敵』ではなかった」と結論づけている。たしかに、筆者がこれまで関わってきた学生たちを見ていると、本を読む学生ほど、スマホやパソコンも駆使してインターネット情報をおおいに活用している。読まない学生は、媒体がなんで

1) たとえば、佐々木（2018）、玉（2020）、小森（2009）

あれ、まとまった分量の文字を読んでいない（読めていない、読もうとしない）ように思われる。だが、その中間の学生たちは、きっかけやしかけがあれば読書習慣をつける余地があると筆者は考えている。

ところで、これら2誌の特集は、コロナ禍による大学の一斉休業や登校禁止の影響による大学生の学習状況の変化は反映されていない。コロナ禍によるリモート授業主体の時期を経て、大学生の読書時間には変化があったのだろうか。また、ほぼ通常通りの通学や生活ができるようになった現在はどうだろう。2024年3月に公表された第59回学生生活実態調査（全国大学生生活協同組合連合会）を見ると、1日の読書時間が「0分」と答えたのは47.4%であった。同調査によれば、2015年以降、1日の読書時間0分という回答は、ほぼ45-50%で推移し、大きな増減はないという。ただし、読書時間を「0分」とした人と無回答を除いた人の読書時間は平均64.7分で、2004年以降で見るとむしろ長くなっている。なお、大学の予習・復習等の勉強時間は、コロナ禍期間よりはやや減少したものの、2019年よりは長くなっているという。

2-2. 本学経営学部生の入学時の読書実態

大学生が普遍的に本を読まなくなっているのは否定できない事実のようだが、我々が直

表1. 「本（マンガ・雑誌を除く）を読むのが好きですか」

	2022年度	2023年度	2024年度
とても好き	93 （16%）	130 （20%）	126 （19%）
まあまあ好き	241 （43%）	282 （42%）	292 （45%）
好きではない	194 （34%）	209 （31%）	180 （27%）
嫌い	37 （7%）	45 （7%）	57 （9%）
計	565人（100%）	666人（100%）	655人（100%）

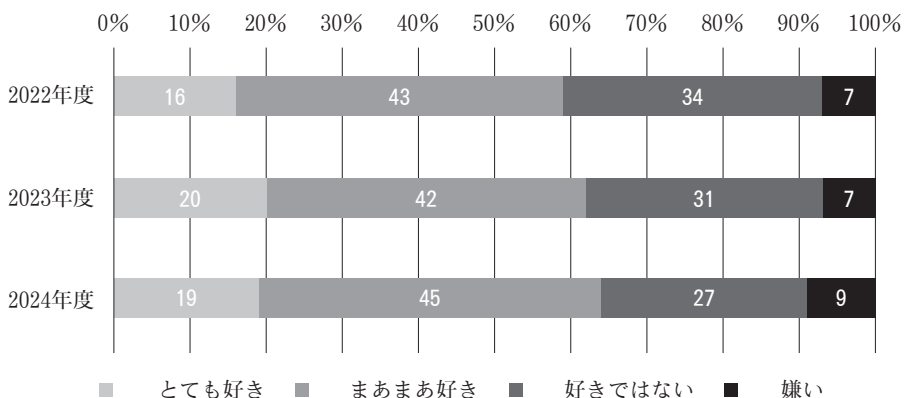


図1. 「本（マンガ・雑誌を除く）を読むのが好きですか」

※表1, 図1とも調査対象は経営学部一年生科目「アカデミックスキル」受講生

に接する学生たちはどうだろう。筆者も担当する経営学部的一年生向け科目「アカデミックスキル」で実施している調査で、その一端を見てみよう。「アカデミックスキル」は2022年度に新規開講した科目で、経営学部の初年次生が全員履修する（必修ではない）。その利を生かして、初回授業で、学習経験や学習スキルに対する経験や得手不得手の意識を尋ねる調査を実施している。初回授業は特に出席率がよいので、例年ほぼ全員に近い経営学部新入生から回答が得られている。2022年度からの3年分の調査から読書に関わる項目を抜粋したのが表1および図1である。

本を読むのが「とても好き」「まあまあ好き」な学生が60%前後、「好きではない」学生が27-34%、明確に「嫌い」と答えた学生が7-9%である。2020年秋に日本財団が1000人の17-19歳男女（学生に限らない）に実施した調査では、「読書は好きか」という問いに対して、「好き」と答えたのは59.7%、「どちらでもない」27.5%、「嫌い」12.8%であったので、おおむね18歳前後の若者の平均的な態度であるといえよう。ただし、日本財団の調査ではマンガも対象としている。

では、本学の学生たちは実際にどれくらいの本を読んでいるか。この点については残念ながら2022年度経営学部新入生のみのデータとなるが、「まったく読まない」と答えた学生が32%、「年に数冊」が31%、月に一冊以上（月に1冊、月に2、3冊、週に1冊以上）が合わせて37%であった。

最近の読書量はどのくらいですか（マンガ・雑誌を除く）

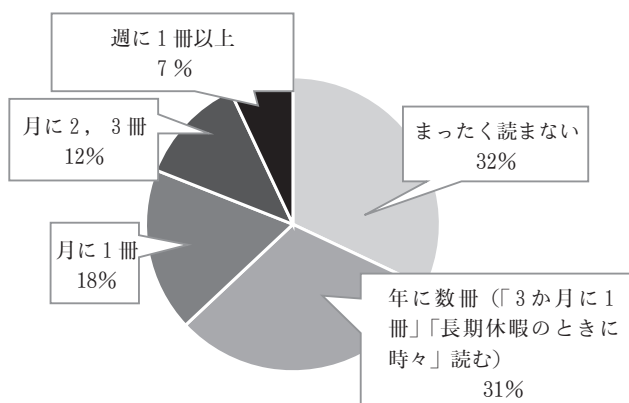


図2. 最近の読書量（マンガ・雑誌を除く）

※調査対象は2022年度「アカデミックスキル」受講生

前段で紹介した日本財団の調査では、「月に本を何冊程度読みますか（マンガも含む）」という質問に対して、「全く読まない」32.7%、「1、2冊」44.8%、「3、4冊」12.2%、「5、6冊」3.5%という回答があった。大学生に限定した調査では、2018年の「全国大学生調査（第2回）」（東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター）がある。この調査では、マンガを除く1か月の読書状況（電子書籍を含む）は、「読まない」48.2%、「1

冊」25.6%,「2冊」12.2%,「3冊」5.4%,「4冊以上」8.6%である。両調査と筆者らの調査では、時期や、「読書」の範囲、質問文、選択肢、回答方法が同じではないため正確な比較はできないが、筆者らの調査対象の学生たちは、それほど読書に勤しんでいるわけではないが、極端に読書習慣がないというわけでもない平均的な範囲ではないかと思われる。

3. 読書を促す授業実践

3-1. 読書指導を実践する科目の概要と指導方針

読書習慣を形成するための教育実践の場合は、筆者が単独で受け持つ2つの科目である。いずれも秋学期開講の選択科目「経営学特殊講義（資料活用スキル）」（以下、資料活用スキル）と2023年度から開講した「経営学特殊講義（東欧の社会と経済）」（以下、東欧の社会と経済）である。東欧の経済と社会においては、科目に関連のある書籍を1冊以上、資料活用スキルでは分野やジャンルの制限を設けず3冊以上読み、指定の読書アプリ（BOOK MARRY）に記録することを課題の一つに取り入れた。本稿で主に分析の対象としたのは、資料活用スキルである。

資料活用スキルは、大学生が活用すべき多様な資料を使って、発表、対話、討論をする力を養うことを目的として2022年度に新規開講した。当初は経営学部1年生が全員受講する春学期の「アカデミックスキル」の発展科目と想定していたが、学年の指定のない科目であるので、実際には1年生から4年生以上までが受講している。両年度の学年別分布は以下のとおりである²⁾。

表2. 資料活用スキル受講生学年別分布

年度/学年	1年	2年	3年	4年	計
2022	20	11	8	1	40
2023	17	8	3	22	50

※両年度とも2クラスを合算している

資料活用スキルは、表3で示したように、参考図書や新聞、雑誌、インターネット情報などの探索方法を学び、各自の関心に沿って資料を選んで読み込み、クラスメイトに紹介するというパターンを繰り返している。読書推進に該当するのは○で囲った回になる。第2回の図書館探索では、授業中に図書館内を見て回り、興味を惹かれた本を3冊選んで、

2) プレゼンテーションを頻繁に行う予定であったので、2022年度は受講人数を1クラス20名で2クラス開講としたところ、先行登録が上限を超過したので抽選となった。にもかかわらず一度も来ない学生もいたので、2023年度は25名まで上限を上げた。事前登録者は、2022年度148名(3.7倍)、2023年度237名(4.74倍)であった。2022年度は全学年を同じ条件で抽選したそうであるが、2023年度は4年生を優先し、3年生以下は同じ条件で抽選したとのことである。結果、2022年度は半数が1年生であったが、2023年度は1年生が34%と少数派になった。

どのような本か、なぜその本を選んだのかを4名ほどのグループで共有する。授業時間内でそのすべてを行うので内容は読めないが、自分と他者が何に関心をもっているのかを知る機会となる。このときに見つけた本は必ずしも読む必要はないとしている。第5回には、本の探し方や読み方について学び、読書記録をつけることを促す。また、書評の書き方についての文章を読み、レジュメにまとめる課題も行う。そして、終盤の授業に向けて、3冊以上の本を読んで読書記録をつけ、おすすめの一冊を選んで書評を発表できるようにしておく。

なお、表3の☆印の付いた回は、授業の一部またはすべてを図書館内で行った。冒頭の講義や終了前のふりかえりなど声を出す必要がある部分は館内のグループ学習室を使うが、各々で資料を探索して読む時間は好きな場所で取り組んでもらった。居心地良く感じる場所を見つけた学生は、その後も足繁く通うようになったようである。文末の表5にも学生の声を挙げてしているので参照されたい。

表3. 経営学特殊講義（資料活用のスキル）授業内容

	授業テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業概要、資料の種類とその特徴について
②	図書館探索 ☆	図書館でブラウジング体験、探索成果（見つけた本3冊）の共有（グループワーク）
3	参考図書に親しむ ☆	参考図書（事典、辞典、白書など）の種類と活用方法を知る
4	参考図書を紹介する ☆ プレゼンテーションのコツ	参考図書の紹介を通して、学問分野の多様性と他者の関心を知る（グループディスカッション）
⑤	おすすめの一冊を探そう	本の探し方、書誌情報の書き方、本の選び方と読み方、書評を読む、読書記録をつける
6	新聞を活用する	新聞（紙媒体）で書評を読む 気になる記事を見つけて共有する（グループワーク）
7	新聞データベースを活用する	データベースを使って新聞記事を探す 記事の紹介を通して、他者の関心を知り、社会問題への関心を高める（グループディスカッション）
8	論文を探す 参考文献リストを作る	データベースを使って論文を探す 参考文献リストの書き方を知る
9	論文の探索 発表資料の作り方	学術論文を探す、パワーポイントスライドによる発表資料の作成のコツを学ぶ
10	雑誌に親しむ ☆	雑誌の種類と特徴を知る、図書館所蔵の雑誌に触れる
11	雑誌記事を紹介する ☆	雑誌記事の紹介を通して他者の関心を知り、専門分野への関心を高める（グループディスカッションまたはクラス全体への発表）
12	インターネットを活用する プレゼンテーション準備	インターネット資料活用時の注意点を知る プレゼンテーションで使用する資料を作成する
13	プレゼンテーション①論文を紹介する	各自が選んだ論文を紹介する（グループワーク）
⑭	プレゼンテーション②おすすめの一冊を紹介する	各自が選んだおすすめの一冊を紹介する（クラス全体への発表）
15	プレゼンテーション③ ふりかえり	プレゼン①②の予備日 学期を通してのふりかえり

さて、本を読むことを課題にする場合、どのような条件が適当か。最適解はなく、各科目のねらいや目標によって各教員が判断するのが適当であろう。東欧の経済と社会では、いくつかの小レポートのうちの一つとして、東欧に関する書籍を1冊以上読んで読書アプリに記録することを課した。

資料活用のスキルの場合は、資料を読むことを繰り返す授業であることはシラバスに明記しており、それを知って事前登録したうえで履修している学生たちなので、読むという行為に強い忌避感はないことが推測できた。たとえシラバスを熟読していなくても、科目の趣旨からして読む頻度や分量が多くても納得がいくであろう。そのため、最終授業日までに書籍3冊以上を読了し指定する読書アプリに記録することと、そのうち特に勧めたい本の書評を提出し、クラス全体にプレゼンテーションすることを必須課題とした。とはいえ、3冊の本の選定や読了には時間を要するので、序盤のうちから予告し毎回確認するようにした。

両科目とも取り上げる本のジャンルや軽重、硬軟、分量等は不問としている。紙媒体か電子書籍かも学生に任せている。ハードルを低くするというねらいもあるが、東欧地域研究に携わっている筆者自身が、専門書や論文だけでなく、小説やルポルタージュ、グラフィックノベル（マンガ）、児童書などもソースとして活用しており、ジャンルを限定する必要がないと考えるからである。ただ、フィクションは、実は紹介するのは難しいジャンルである。未読者の楽しみを奪うことにならないよう結末を伏せる必要があるため、どこまでをどのように説明するか匙加減が難しい。また、そもそも感情（感動、笑い、意外性）に訴えるジャンルであるため、情緒的な感想に陥りがちである。だが、「感動した」「面白い」と言ったところで、聞き手は紹介者ほどには関心をもてない。そこで、中盤に書評家の長瀬海氏による大学生向けの書評の書き方講演録（長瀬，2020）を読み、レジュメにまとめる作業を入れている。

過去十数年、複数の大学で同様の授業をしてきたが、ジャンルを制限しなくても公序良俗に反するような本を取り上げる学生はいなかった。むしろ学生は聞き手に好まれそうな本を選ぼうとするので、人気の作家や作品、自己啓発的な本が多い。本学での授業実践で取り上げられた作品やジャンルは次章で紹介する。

3-2. 学生はどこで書籍の情報を得ているか

学生はどこから本や本に関する情報を得ているのだろうか。資料活用のスキルでは、本に出会う場所や機会、入手している場所や方法についてグループで出し合い、そこで話されたことをクラス全体で共有している。その際に出たものや、おすすめの一冊を紹介するプレゼン、授業終了時に書くコメントシート（学習記録カード³⁾）などから拾い上げたものを以下に列挙する。

3) 「学習記録カード」については、橋本・藤田（2024）に掲載した図を参照されたい。

表4. 資料活用のスキル受講生が本と出会う機会(2022-23年度)

本と出会う／本を探す ／入手する場所	書店、図書館、インターネットショップ（Amazon、メルカリなど）、 自宅の所蔵本
本に関する情報源 ／本と出会うきっかけ ／入手や読書の判断の基準	・書店で「ジャケ買い」（表紙に惹かれて）、 「帯買い」（帯の文句に惹かれて） ・映画化、映像化されたもの ・TikTok や Youtube の本をおすすめする動画 ・友達や家族に勧められて ・Amazon で評価を見て ・家にあったもの ・一度読んで面白かった作家、好きな作家の作品 ・(授業等で使った書籍の) 参考文献に挙がっていたもの ・書店で店員に聞いて

書店で表紙を見て選ぶという声は、毎年、幾人もの学生からあがる。表紙が見えるということは面出しが平積みになされているのであろうから、書店が推そうとしている本、あるいは既にヒットしている本であろう。出版社や書店の戦略は若者に響いているのだろう。

新しく情報源として登場したのは、TikTok や Youtube 動画のブックレビューである。筆者は他学でも同様の聞き取りをしてきたが、ブックレビュー動画を参考にするというのは、ごく最近の傾向である⁴⁾。

表4にあるように、学生は文字情報や人の勧めなど、さまざまなルートで本と出会っている。しかし、新聞や雑誌の書評を参考にしているという声は、少なくとも筆者が直接担当した学生からは聞かない。そもそも新聞や雑誌の購読が激減しているのでそもそもないではある。そこで、2023年度の授業では、紙の新聞をめくって、書評欄や書籍に関する記事（著者紹介など）をみつけるワークを導入した⁵⁾。そうすると、書評欄や記事と出版社の広告の見分けがつかない学生がいることがわかった。近年、インターネットでは、広告やタイアップ投稿においてはその旨を提示しなくてはいけなくなっているが、紙媒体の逐次刊行物においても紙面構成を読み取れない学生が一定程度いるのである。教員にとっては意識すらしていないことでも、その媒体に不慣れな学生には説明が必要なことがある。学生が何を知らないのか、わからないのか、何と何を混同するのか、実践してみて初めてわかることがある。

4) 飯田（2023）は、TikTok の影響に関しては、「新奇のタイトルが突然売れた」のではなく、「すでに定評のあった作品が再度注目を浴びた」ケースが多いと指摘している（57ページ）。

5) 教材に使う紙の新聞は、図書館に依頼して廃棄前の全国紙4紙（朝日、日本経済、毎日、読売）1ヶ月分（授業日の一年前のもの）をとっておいてもらって活用している。費用をかけずに大量の紙の新聞を確保するための策でもあるが、一年前のニュースを目にするのはなかなか新鮮で、学生の反応も良い。なお、読書関連以外にも各自が興味を持った記事を拾い、それをグループやクラスで共有している。さらに、翌週はデータベースで後日談を調査し、共有するという授業をしている。新聞を使った教育実践については、橋本（2014b）でも報告している。

本との出会いについて、平山（2020）は、「大学生に読書リストを配っても効果は薄い」ので、なんらかの「しかけ」が必要であるとして、いくつかの方法を紹介している。たとえば、授業内容に即した書籍を毎回1冊程度紹介する、授業のテーマに関連づけた1ダースほどの本を選んでストーリーを作って紹介するブックトークするなどである。教員の紹介を聞いた学生が見つけた本を報告してくれ、そのことを授業で紹介することで当該学生の授業関与が高まり、同輩にインパクトを与えるという効果も述べている。さらに、新聞各紙の書評欄や広告欄を活用して、幅広い分野の書籍に目を配り、多角的な思考の訓練の機会にするなど「教員も鍛える」ことを提言している。いずれもおおいに賛同するところである。

教員も鍛えるということでは、筆者は学生が好む本の傾向を知るために、学生のおすすめ本を意識して読んできた。これまでに160冊ほど読んでいる。このことを学生に伝え、自分の取り組みを見てもらっているという満足感、自分が選んだ本を認められたという自己肯定感に繋がるようで、たいへん喜ばれる。教員にとっても、学生を理解するのに役立つうえ、新しい作家や執筆者と出会う機会にもなる。この実践から得られた知見や教育効果については、橋本（2014a）で報告している。また、学生に読書を促し書評を書かせるからには範を示そうと、2015年からWeb誌上で月1回の書評連載を続けている⁶⁾。

3-3. 読書体験の共有 「おすすめの一冊」の紹介と読書アプリの活用

かつて筆者は、学生が書ける課題、書こうとする課題の条件を分析したことがある（橋本 2012）。学生は、誰に、何を、何のために伝えるのが明確で、書く必要性を感じる課題には意欲をもって取り組む。さらにテーマに関心があれば内容が充実する。これは、ライティングだけではなく、読む課題でも同様である。自分と同世代の学生に自分の選んだ本を紹介するとなると、納得のいくものにしようと力が入る。資料活用のスキルのような科目は、特定のテーマや分野を学ぶ科目以上に、その課題に取り組む意義を見いだせないと身が入らない。それゆえ課題図書ではなく、学生に自分で本を選んでもらっている。

おすすめの一冊の紹介を授業の終盤に行っているのも、準備に時間を要するからというだけではなく、仲間に自分が選んだ本を紹介するという意識を高めるためでもある。同科目では学期を通じてメンバーを入れ替えて何度もグループワークを行い、ほぼクラス全員と接する機会をもてるようにしている。それによって、学期の終わりごろにはクラス全員に向けてプレゼンテーションをすることへの抵抗感が多少は下がっていることも期待できるのである。実際、「それまでにほとんどの人とグループワークをしていたので、あまり緊張しなかった」という感想を残した学生（2022年度）もいた。

本を選び、読み、記録をつけるというプロセス自体も課題にした。そのツールとして、日本事務所の読書アプリ BOOK MARRY の試用版を活用している。BOOK MARRY は教育機関向けに開発された学習支援ツールである。学生や教職員の間で参考文献や本のレ

6) 関西ウーマン「信子先生のおすすめの一冊」 https://www.kansai-woman.net/Review_a.php?cid=12

ビューを共有するスマートフォン用のアプリケーションで、「炎上」等を避けるためメッセージ機能はない。ハンドルネームによる投稿も可能である。レビュー機能のほかに、個人の文献記録として使用できる非公開のメモ機能もある。管理権限のある者（教職員など）は本名を含むデータの収集と閲覧が可能である。クラウドサービスではあるが公開は学内限定なので、アプリのダウンロードや使用を促しやすい。操作性や機能にはまだまだ改良の余地があるが、利用者の声を採り入れながら日々アップデートしている。筆者も図書館を通じて質問や要望を伝えている。筆者の担当科目では、資料活用のスキルが2022-23年度の2期、東欧の経済と社会が2023年度、のべ300人ほどが利用した。学生の使用感 は表5に列挙した。

3-4. 学生はどのような本を読んだか

資料活用のスキルでは、2022-23年度秋学期の2期でBOOK MARRYに登録されたレビューは214件であった。本は読んだもののなんらかの理由でBOOK MARRYに登録できず、別の手段で教員に報告したものが他に25件あった。授業を最後までまっとうした学生はいずれも3冊のノルマを達成した。

資料活用のスキル受講生がBOOK MARRYあるいはその他の何らかの形で読了の報告をした本を日本十進分類法（以下、NDC）で分類したのが図3である。もっとも高い割合を占めているのは9類（文学）74%である。次に1類（哲学）9%、3類（社会科学）7%となっている。1類（哲学）に分類されている本は、ほとんどが自己啓発本である。3類（社会科学）は、経営やリーダーシップに関するもの、労働問題、働き方や生き方など幅広く含んでいる。

一方、おすすめの一冊で取り上げられた本（筆者に書評原稿を提出し、授業内で口頭発表した本）では、9類（文学）の割合は60%に下がり、3類（社会科学）が15%、1類（哲学）22%と割合を増した。おすすめの一冊として人に勧める本は、必ずしも自分が一番勉強になったものとか、はまったものとは限らない。それなりに受け入れられやすいものになる。かつ、学生は人と被らないものを選びたいという意識をもっている。受講生に人気がある作家はたしかにあるが、おすすめの一冊プレゼンで同じ作品が重複することは少ない。それが、この差に表れているのではないと思われる。

資料活用のスキル受講生が挙げた本のうち、もっとも取り上げられたのは、住野よるの作品である（15件5作品）。そのうち11件は、2016年のベストセラーで映像化もされた『君の膵臓が食いたい』（刊行は2015年）であった。続いて東野圭吾の8件6作品、湊かなえ5件4作品、新海誠『君の名は』5件、辻村深月5件4作品、水野敬也『夢をかなえるゾウ』シリーズ4件、風良ゆう3件、有川浩3件である。東野、湊、水野、有川らは、筆者が他大学でおすすめの一冊プログラムを実施するようになった2011年からコンスタントに学生に人気がある。作品別でみると重なりは少ない。2期を合わせても、『夢をかなえるゾウ』が4件、F『20代で得た知見』が2件、汐見夏衛『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』が2件である。前段でも述べたが、大きく外れたものも避けるが、人と被

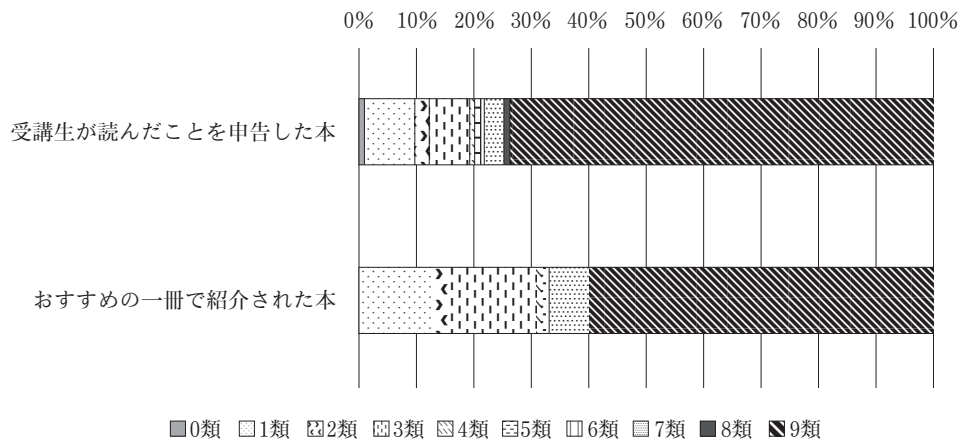


図3. 資料活用のスキルで読まれた本 (NDC 分類別)

※凡例の詳細 0類：総記 1類：哲学 2類：歴史 3類：社会科学 4類：自然科学
 5類：技術 6類：産業 7類：芸術 8類：言語 9類：文学

ることも避けたいという意識が表れていると思われる。実際、人と被らないようにしたというコメントは過去に何度も読んでいる。

ベストセラー本や自己啓発本の紹介においては、「普段あまり本を読まない私でもあつというまに読めた (ので、本が苦手な人にもおすすめです)」といった趣旨の文句が相対的に多い。なお、そうした表現は、学年が上がるにつれてなくなっていく傾向がみられる。

2022年度と2023年度では受講生の学年別比率がかなり違うので断定はできないが、3-4年生になるとノンフィクションを取り上げる割合が高まる傾向があるように思われた。授業やアルバイトを通して社会問題に対する関心を高めていったり、進路や人生設計について考える機会が増えたりすることを反映しているのではないかと推測する。この点は今後もう少し掘り下げて探ってみたい。

なお、ノンフィクションは、フィクションよりも内容に沿った紹介がしやすく、誰にとってどのような意義のある本なのか、誰に勧められるかといったことをとらえやすい。そのため紹介も相対的に明快になる傾向があった。この点についても、学年の違いなのか、ジャンルの違いなのかなど、もう少しデータが増えれば見えてくることがあるかもしれない。

このように、ジャンルを制限しない場合、学生の多くが小説を選んで読むという傾向がたしかに見てとれる。しかし、だからといって学生がそれ以外の分野に関心がないと結論づけるのは早計である。本稿では詳細は省くが、資料活用のスキルでは書籍以外に、参考図書 (辞書事典・統計白書類)、新聞記事、論文、雑誌記事等を探索して紹介するグループワークをしている。そこでは非常に幅広い分野のコンテンツが選ばれている。また東欧の経済と社会では東欧に関する本であればジャンルは問わないと説明していても、受講生が選んだのは、地誌、歴史、現代政治、入門書に集中し、文学はほとんど読まれなかった。

学生は彼らの関心に合い、かつ、その場（課題）にふさわしいと彼らが思う本で、読めそうだと思う本を選んでいるのである。であるならば、さまざまな場（授業や課外活動等）で、本を紹介したりされたりする機会が増えれば、彼らの選書の幅が広がり、読む量と時間が増える可能性がおおいにあるのではないだろうか。

4. 読書を促す授業実践の効果

以上の授業実践を受講生らはどう受けとめたか。授業最終回に書いてもらっているふりかえりシート（図4）の記述から読みとってみたい。

2023年度秋学期 経営学特殊講義・資料活用のスキル（橋本）

授業をふりかえって

- 1) 出席状況と受講姿勢をふりかえって自己評価してください
出席【 】回
- 2) もっとも印象に残った授業内容をひとつ選んで○をつけ、その理由を書いてください
 - ・図書館探索 ・参考図書の紹介 ・新聞（現物）での記事探し
 - ・新聞データベースでの記事探し ・学術論文探しと参考文献リスト作成
 - ・論文プレゼン ・インターネット情報活用 ・雑誌記事探しとプレゼン
 - ・おすすめの一冊プレゼン ・BOOK MARRY への感想登録
- 3) BOOK MARRY に登録した名前と本の題名を書いてください
- 4) この授業を通して、あなたが学んだこと、力を伸ばせたことを具体的に書いてください
- 5) 本科目に関連があることで授業外に取り組んだこと、習慣にしたことなどがあれば書いてください
- 6) その他、全体を振り返っての感想、メッセージ、アピール等

図4. 資料活用のスキルふりかえりシートの項目（2023年度版）

2期4クラスで得た有効回答72件のうち、「もっとも印象に残った授業内容」の項目でおすすめの一冊プレゼンを選んだ学生は28件であった。次に挙げたのは、学術論文の探索と紹介が21件、図書館探索11件であった。この数字だけを見るとさほどインパクトがなかったように見えるが、「この授業を通して学んだこと、力を伸ばせたこと」、「本科目に関連があることで授業外に取り組んだこと、習慣にしたことなど」、「全体を振り返っての感想」においても、読書に関する多くの記述が得られた。それらを書き出したのが表5である。記述内容によって、①苦手・忌避感の克服、解消、②意識の変化、肯定的感情、③行動の変容に分類した。

詳細は表5を読んでいただきたいが、本を読む習慣がなかった学生や苦手意識があった学生たちがそれを克服できたと記していること、本を読む楽しさを実感している学生が多数いること、おすすめの一冊プレゼンや読書アプリを通して他者の関心や勧める本に関心をもったと書いていること、読書習慣や図書館に通う習慣がついたという記述が多数見ら

れることから、本授業実践は、本に苦手意識のある層からもともと嫌いではない層まで、総じてプラスの効果があったといっていよう。なかには、3冊と言わず5冊課しても良いのではないかという頼もしい提案をする学生もいた（表5）。

なお、学生からはとくに言及がなかったが、時間的制約から、おすすめの一冊プレゼンは発表のあとに教員から一言コメントをするのみになっている点については迷うところである。同科目では、書籍以外の新聞、雑誌、参考図書の紹介は、1年生から4年生以上の学生までがランダムに混ざったグループワーク（出席状況に応じて3～4名から10名ほど）で行った。思いがけない話題に沸いたり、似た話題が複数人に取り上げられて話が盛り上がったりと活発な対話が展開された。下級生をリードしなくてはという意識で上級生が率先して場を仕切ったり、上級生のプレゼン力やリーダーシップに下級生が感心したりと得がたい学習機会が作れていた。論文を選んで紹介するプレゼンではスライドを提示しながら高度な内容をわかりやすく説明しようとする姿、真剣に聞き入り、質問や意見をする姿が見られた。おすすめの一冊紹介でも、理想的には受講生どうし、本をめぐるであれこれ対話する時間をとりたいところではある。ただ、手前味噌ではあるが、教員が全員の発表になんらかのコメントをしていることに感心してくれる学生もいた（表5）。最善ではないかもしれないが、一定の教育的効果はあったとみなしておきたい。

読書記録を課したもう一つの科目、東欧の経済と社会ではどうだったか。232名の履修者のうち、6割（10回）以上出席し、各種課題を出して単位取得の意志を示した9割の学生（212名）のうち186名が、BOOK MARRY ないし別の形での読書記録（1冊以上）を提出した。課せば、本を手に取り読んで記録するということに取り組むことはわかった。ただ、資料活用のスキルほどには読書習慣の形成を促す効果はなかったと思われる。今後、多人数講義科目でも読書習慣を促す工夫やしかけ、学習効果をはかる手立てを追究していきたい。

表5. 資料活用のスキルふりかえりシートより読書に関する記述一覧（2022, 2023年度）

※原文ママ

苦手・忌避感の克服, 解消
- 私は小さい時から、漫画を読んだことがなくそれが理由かはわからないが、日常的に本を読む習慣がなく、むしろ本を読めと言われてもあまり前向きではなかったが、今回の授業をきっかけにぜひ読んでみたいと感じる本を、他の受講生が発表していて、その本を一つ実際に購入して読んでいる今の自分を見て、この授業のおかげで、人生で初めて本を購入することができた。私が学んだことは本の大切さと向き合い方である。力を伸ばせたところは、本を読みたいと思うことができる感性である。 - 私は、本の面白さを初めて学びました。本を年に1冊も読まないぐらい、本に興味がありませんでしたが、本を読むことで、新しいことを知ることができたり、本は人の心を動かすということを知りました。他の授業でも論文やデータベースを使う機会があったので、とても役立ちました。 - 大学に入ってから本を読む習慣がなかったので、久しぶりに読書の楽しさを思い出すことができ、長文に対する嫌悪感が減った。

- ・本嫌いの私でも、関心をもつことができたので、本嫌いを克服できる授業だと思いました。
- ・普段本を読むことが全くないので、本の面白さというのをこの授業を通して学ぶことができました。
- ・今まで本を読むことが全然なかったけど、少しおもしろいと感じるようになり、本を読んでみようと思えるようになったこと。
- ・本を読むことに抵抗がなくなりました。
- ・人生で本を読んだことが5回もありませんでした、この授業を通じて本に興味を持つことができました。

意識の変化, 肯定的感情

- ・これからは休日に読書をする時間を設けることが、習慣にしたい理想である。
- ・本は人類進歩の階段である。いい本はほんとに有益だと思います。
- ・今回この授業を受けて、本への見方が変わったし、その活用する方法も学べた。これからもっと本を読みたい。
- ・読書の楽しさに気づけて良かったです。
- ・おすすめの一冊でたくさん読みたい本ができて楽しみができました！
- ・この授業を受けてから、前よりも本に強くなったと思いました。
- ・本を読むことで自分が知らなかった知識を得ることができると感じました。今まで勝手なイメージで知ったつもりでいたことが、それではないと正されたからです。
- ・書籍にあまり興味がなかったですが、この講義を積極的に受け、全講義出席して、書籍に対してとても興味を持ちました。本は苦手でしたが、この講義を通して、とても興味深くなりました。他者の紹介を聞いて、ミステリーや小説、物語など様々な本が存在するなと改めて感じました。
- ・図書館探索の講義の前に、本を見るようにしていました。社会人になっても、本を読む習慣をつけようと思えました。
- ・図書館に行って、お気に入りの本を見つけたいと思ったので、本を読む習慣をつけたいと思った。
- ・本や論文など長い文や文字を読む力や分析力が身に付き伸ばせたと感じる。プレゼンやグループ発表などで作成する力と伝える力も身に付いた。
- ・今回いろんな人のおすすめ一冊を聞いてよかった。気になる本がたくさんあったので読んでみたい。
- ・BOOK MARRYで他の人は何を読んでいるのかを見て、自分の好きな系統ではない作品も多くあったので気になっている。
- ・皆さんの書評を聞いて、どの本も読みたくなりました。私も上手に伝えられたかな？と不安になりましたが、伝わっていたら嬉しいです。
- ・BOOK MARRYはかなり前から伝えられているので、3冊ではなく5冊に変えた方がいいと思います。/ BOOK MARRYやおすすめの一冊のおかげで本を読む習慣ができました。スマートフォンだけでなく、本も重要です。/ この講義で色々な体験をさせていただきありがとうございました。これを機に、読書や新聞に目を通すのを続けたいです。おすすめの一冊の感想は、「読者を魅了する秘密は各著者によって異なる」ということがわかりました。
- ・前から小説は少し読んでいましたが、BOOK MARRYの課題でまたいろいろな小説を読むことができました。
- ・以前より本を読もうと自ら思うことが増えた。この授業がきっかけで、新しく本を読んだり、昔読んだ本を読みかえすことが増えて良かったです。今後活かせることも多くあったので活用していきたいと思います。
- ・好きな本を好きに紹介できる良い時間でした。

- この授業のおかげで、本が好きになりました。本を読むと、感情をゆさぶられ、とてもおもしろいです。本との出会いのきっかけを作って下さりありがとうございました。
- 本を読むと知識をつけて様々な分野に生かすことができるという事を知れた。
- 読書の習慣も身に付けたいので、テストが落ち着いたら、おすすめの一冊のプレゼンで紹介された本を読むつもりです。
- おすすめの一冊のプレゼン後に先生が全員にその本に関する情報をいう時間はすごく尊敬するものであり、中にはこの本はあまり知らなかったが、著者は知っているなど、すべて知っていて事前に勉強して知識を入れたのではなく、もともと知っていたのだと感じて、とても尊敬した。先生みたいな本の知識にあふれた人間になるために、今から頑張りたいと思った。

行動の変容

- 前から本を読んでいたが、新しくジャンルの本も読むようになった。
- 一週一回図書館に行って、新しい本を読んでみるようにしています。
- この授業で本を読むことの楽しさ・大事さに気づいたことで300ページあれば読んでいなかったが、毎日10ページでも読めば一か月で読むことができるため、毎日読書する習慣をつけることができました。
- 本をよむのがにがてだったのですが年末ぐらいから本をすこしずつよむことをしています。
- 本を読む習慣が出来たこと。全部読むのではなく、読みたいポイントをおさえて読む術を身につけた。
- 図書館によく行くようになった。
- 図書館の2F, 3Fにいった時とても居心地がよくなったので、週一でそこで勉強するのが習慣になった。
- 少し、本屋等に行くことが増えた。
- 授業以外に朝30分本を読む習慣ができました。春学期よりも図書館の利用が増えました。
- 今まで本を読むことがにがてでしたが、月に1～2冊読む程には好きになりました。
- 本を読んでみようとして新しい本を買って読んだ。
- 大学生になってから本を読む機会が減ったが、BOOK MARRY をキッカケに様々な分野の本を読むようになった。
- 授業を受ける前よりも本を読むようになったと思う。また図書館も利用するようになった。
- 本を読む習慣が極端に増えた。1か月に3冊は読んでます。
- 本を2カ月に一冊とゆっくりではあるものの読むようにした。
- 本を紹介することで本について深く知ることができ、本を読む習慣が増え、理解を深めることができた。
- 参考資料の書き方から、本を読む習慣まで、この講義を受けたことで、多くの学び、気づきを得ることが出来ました。
- 今まで本を読む習慣が無かったが、移動時間に本を読むようになった。
- 本を見る回数や図書館に行く回数が増えたと思います。文字に強くなりたいという目標もあり、本を見る習慣は前よりも多くなりました。
- 資料活用のスキルを受講したことで「読書」という新しい趣味をつくるきっかけを作ってくださいありがとうございました。本を読むことで今まで自分に無かった考え方を得たり、単純に楽しいと感じることができました。おすすめの一冊の本をできるだけ読んでみたいです。

- ・本を借りるきっかけを作れた。あの本読みたいけど、うーんという時に課題図書と一緒に借りることができたから。
- ・図書館に行く回数が前より増えた。静かで集中しやすいから。
- ・読書です。最近は人事系の本をたくさん読んでます。(会社の人事部に配属されるので)
- ・今回の BOOK MARRY の課題で本を読む楽しさを思い出し、暇があれば図書館に行って、本を読むようにしている。本屋さんに行ってポップに注目したりもするようになった。
- ・BOOK MARRY を読んでいたら授業外で本を読むことが習慣になりました。
- ・大学に入って読まなくなっていた本を読むようになった。
- ・通学中の電車に乗っている時間に読書をするようになった。
- ・おすすめの一冊プレゼンでは納得のいく書評が書けました。他の人の本も読んでみたいと思いました。/週1で1冊読んでいます。中学生のころの朝読書以来です。
- ・月に2冊以上本を読む習慣ができました。
- ・本を読むという習慣が身についた。図書館に授業時間外に行ったり本屋さんで本を買って読んだ。
- ・本を読むことが増えた。
- ・図書館を勉強だけでなく本を読むという理由で利用するようになった。
- ・週に一冊以上は読書をするようになった。以前から読書はしていたが、意識的にするようになり新たな日常になった。
- ・図書館で本を探したり、ネットで本を探すなど、本に興味が湧いたため、よく探すようになりました。

5. 今後の課題

以上、読書を促す授業実践について報告した。本学経営学部生は、本を読むということにそれほど忌避感はないが、読書習慣があるかといえばそれほどでもない、現代の平均的な大学生だが、本を読む課題に意義ややりがいを見出せば真摯に取り組み、そこで手ごたえを感じれば習慣化する可能性をもっていることが確認できた。また、その場に合っていると彼らが考える選書をする傾向も見えてとれた。本を紹介したりされたりする場の機会と多様性が増せば、彼らの選書の幅はさらに広がり、読む量と時間も増えることが期待できそうである。

資料活用のスキル受講生のふりかえり記述では、授業で取り組んだことによって読書習慣がついたという声が多数あったが、授業終了後も読書を継続しているかはフォローできていない。BOOK MARRY の利用状況については、図書館を通じて個人を特定しない形で提供してもらったが、授業期間終了後はまったく利用されなくなっていた。指定の読書アプリを使っていないことが、即、受講生らの読書習慣が定着しなかったことを意味するわけではないが、授業でついた読書習慣はどの程度、継続するものなのか、のちのちにも影響を及ぼしていくものなのか、いかにしてそれを確認するのかについては今後の研究課題としたい。

謝辞

本授業実践は本学図書館ならびに日本事務所の協力を得て実施した。記して感謝申し上げたい。

引用文献

- 飯田一史 (2023) 『「若者の読書離れ」というウソ 中高生はどのくらい、どんな本を読んでいるのか』 平凡社
- 金子元久 (2020) 「読書の危機・大学の危機」『IDE：現代の高等教育』(621) 4-10
- 小森伸子 (2009) 「大学生の「読書」に関する予備的検討」『摂南大学教育学研究』5, 33-44
- 佐々木俊介 (2018) 「いまどきの大学図書館と大学生の読書 ～学生生活実態調査結果から考える～」『生活協同組合研究』508(0), 20-26
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2024) 「第59回学生生活実態調査概要報告」
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (2024年9月10日最終確認)
- 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター (2018) 「第2回全国大学生調査(2018年)」
<https://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat82/22018.html> (2024年9月10日最終確認)
- 玉真之介 (2018) 「「リーディングリスト運動」を大学教育改革の中に」『生活協同組合研究』508(0), 27-33
- 玉真之介 (2020) 「大学生と読書 ―全国大学生協連『学生生活実態調査』より―」『IDE 現代の高等教育』(621) 31-37
- 長瀬海 (2021) 「読書人カレッジ@桃山学院大学 長瀬海氏による書評の書き方講座 抄録」大学生と「週刊読書人」編集部編『書評キャンパス@読書人2020』読書人
- 日本財団 (2020) 第30回18歳意識調査「第30回－読む・書く－」詳細版および要約版
https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2020/10/wha_pro_eig_152.pdf (2024/7/7 最終確認)
- 橋本信子 (2012) 「大阪商業大学初年次教育科目におけるライティング指導の実践」『大阪商業大学論集』8(2), 71-80
- 橋本信子 (2014a) 「書評作成を通じた能動的学習：大阪商業大学初年次教育科目「基礎演習Ⅰ」における「おすすめの一冊」プログラム2011～2013年」『大阪商業大学論集』9(4), 113-122
- 橋本信子 (2014b) 「学生の知的好奇心を引き出す授業実践：大阪商業大学における「おすすめ」を紹介するプログラム」『大阪商業大学論集』10(2), 15-28
- 橋本信子・藤田里実 (2024) 「多人数クラスにおけるアクティブラーニングの工夫―初年次教育科目「アカデミックスキル」における授業実践―」『大阪経大論集』75(1), 301-315
- 浜島幸司 (2020) 「大学生を読書に向かわせるもの」『IDE：現代の高等教育』(621) 37-42
- 平山祐一郎 「大学生の読書をどうするか」『IDE：現代の高等教育』(621) 26-30